

エキユメニカルな対話におけるルーテル教会

——その過去と将来

マイケル・ルート

日本ルーテル神学校の百周年記念が祝われている中、今回お招きに与り、たいへん光栄に思っています。私が働いているルーテル神学サザンセミナーからは多くの牧師がアメリカ南部ルーテル教会に送り出されますが、このアメリカ南部ルーテル教会は、日本のルーテル教会の宣教に深い関わりのある教会です。また、私自身の家族も、宣教にかかわった歴史を持っています。(私の祖父は一九二〇年代のビルマにあったバプテスト神学校の学長でありました。)そして、私たちの神学校のマルクス・ミラー学長はお招きいただいている九月二三日の百周年記念行事をみなさんと共にお祝いできますことを心待ちにしています。

さて、今回「エキユメニカルな対話におけるルーテル教会、その過去と将来」という主題でお話をするように求められました。それは私にとって決して意外なことではありませんでした。といいますのは、私はこの学校の江藤直純先生とは面識があったのですけれども、私が最初に江藤先生にお会いしたのは、先生がルーテル世界

連盟（LWF）のエキュメニズム委員会でお働きくださったときでありました。また、徳善義和先生とは、カトリックとLWFとの対話のための国際委員会の会合のたびにお会いしてきましたし、また、その同じ対話の委員会では、これからは鈴木浩先生とともに働かせていただけるということですので、大変楽しみにしているところだからなのです。

私自身がエキュメニズムにおけるルーテル教会というテーマにたどり着いたのは、こうした実際のエキュメニカルな交わりと委員会における広がりとは、またある意味では限られたものでしかありませんが、私自身の経験からくるところであります。私はLWFのエキュメニカル関係働きを担って参りましたが、特に、北アメリカ、ヨーロッパ、またそれらに比べるとわずかな関係ですけれどもアフリカ南部のルーテル教会に関わってきたわけがあります。こうした地域においては、キリスト者は人口の多数派となっています。北アメリカにおいてはキリスト教が数世紀にわたって支配的な地位にありましたし、ヨーロッパでは千年単位でそうでありました。キリスト教はこうした国々での文化に深く根ざしています。そうした実際の状況がエキュメニカルな働きにも影響しています。教会一致のエキュメニズムは、単に様々な教理や神学の間にどう一致を目指すかについての議論を目的として生まれてきたのではなく、むしろ具体的な諸教会間の、さらに言うならば、独自の歴史と内部文化とをもつ団体・組織同士の間にも生まれてきた関係において目指されてきたもので、実際にそこでの具体的な教会の歴史と文化とが今日のエキュメニカルな交わりの可能性を形作ってきたわけでもあります。私が住んでいます合衆国の南部においては、カトリックとルーテルの両方ともが少数派であります。非常に大きな割合を占めているバプテスマト派並びにメソジスト人口の中で私たちはマイノリティーなのです。カトリックとルーテル教会のこうした似通った状況というものが、両教会双方を互いに引き寄せているということがあるわけです。スウェーデンにおい

ては、宗教改革以来ルーター派は確立された国教会で、小さなカトリック教会をさらに小さくしているということになります。ですから、こうした異なる事情を持つ二つの場所においてはカトリックとルーテル教会という関係も必然的に異なったものとならざるを得ないのです。

私は実際に日本におけるエキュメニズムについては存じ上げませんし、話すこととすれば部外者として話すことになるわけです。私は、エキュメニカルな関係というものはここ日本ではより単純なものではないかと考えたりするわけです。キリスト者間の議論というものも日本的宗教事情に対するものとして異なった姿を持つていことでしょう。日本のキリスト教会は、私の知る限りでは、一七世紀のドイツで起こったように、互いに戦争し合うというようなことはいまだかつてありません。あの三十年戦争では、実際に数百万人の人たちがいのちを落とすということがあったわけです。しかし、いづれにしろ皆様の教会の置かれているエキュメニカルな脈絡の具体的な性質ということは皆さんからお聞きするのが一番いいわけです。

そこで、今日は、私は私の知るところ、つまりLWFおよび北欧の教会という視点から見たエキュメニズムの状況というものに視点を合わせてお話ししたいと思います。

I

ここしばらく、エキュメニズムについて話し始められますときに、「エキュメニズム冬の時代」という喩をもつて話されることが普通になってきているように思います。たとえば、二〇世紀の初めのころにエキュメニズムの春があって、それに続いて夏の時代が同じ世紀の半ばに位置づけられる。そのいわば頂点に第二バチカン公

会議というのがありまして、エキュメニカルな対話というものが花開く。やがて秋になり、空気は冷え込んで感じられ、物事は凍りつき始めるといふ感じ^①です。しかし、私はこういう喩は私たちの状況を理解するにはあまり適切なものではないと次第に思うようになりました。たとえば、冬というのは、成長がないとか、光がない、温かみもないというイメージが強いので、この季節には、家のなかに閉じこもっているということが一番良いことだということになります。冬は新しく土地を耕したり、新しい種まきをしたりする時ではないということですから。おそらく、この冬がエキュメニカルな氷河期の始まりだということのように言われるわけですが、そんな状況におもてに出されたりしたくはないと思ふかも知れません。

確かにエキュメニズムについて言われる厳しい状況はあるでしょう。しかしながら、ルーテル教会のエキュメニズムにおいて最も重要な成果のいくつかは、この「エキュメニズム冬の時代」といわれるようになった後に実ってきたものです。すなわち、北欧やカナダ、アメリカでのルーテル教会と聖公会との間でのフルコミユニオンの成立や、またカトリックとルーテル教会との間の『義認の教理に関する共同宣言』などです。実際の到達したところをみるならば、「冬」という言葉はこの季節を表すのに適切とは見えないわけです。

また、他方、「エキュメニズム冬の時代」という言い方は、誤った楽観主義を奇妙なことに生み出してしまったと言えるかもしれません。冬というのは永遠に続くこととはない。私たちにできることは、ただ待つことだけで、やがて春は必ず来る。「冬」という喩は私たちにちよつとした積極的なエキュメニカルなニュースを氷が砕けたとか、雪解けの始まりだというような意味で受け取るように働いてくるわけです。エキュメニズムというのは、ちよつと天候がそうであるように、その季節がある。だから、今は耐えるべきだということになるわけです。事柄はそんなに単純なのでしょう。私たちはエキュメニズム冬の時代にあるのではない、ましてや氷河期で

もない。むしろ、私たちは、エキユメニズにおける大変困難な課題（挑戦）の中にあると言えるのでしよう。その課題は、春の訪れとともに簡単に溶けていくというものではありません。WCCの基礎が据えられた時や、一九六〇年代、七〇年代におけるエキユメニカルな対話の急速に進められてきた時に思い描かれたエキユメニカルな希望の多くは、現実的な将来のうちには実現しそうにはありません。近づいてきた関係も、以前より遠ざかるということかもしれません。エキユメニズムの旅は私たちが予期してきたところよりもずっと長いものになると思われるのです。

こうした私たちの今日のエキユメニズムの状況についてみるならば、「冬」という喩よりも「旅」という喩の方がよいように思います。ある旅は短く、直接的であるかもしれないが、あるものは何年にもわたるもので、荒野における放浪の時期というものを内包しているかもしれません。エキユメニズムの旅もまた、今、放浪の時期を過ごしているのであって、私たちはこの荒野にいるかのような言い方をして決して言いすぎだとは思わないのです。これから先の道行がどのようなになるか全く分からないところにある。いくつかの通過地点にたどり着いてきたことは確かだけれども、しかし、この旅の目的地は、以前はずっと近いところにあると思っていたのです。そして、またこれから先どの道を行くのが最も良い道なのか何も確かなものがないということでもありません。そして、今はこうした歩みを支え、保つということさえ、ますます難しくなってきたというわけです。

キリスト者には、この荒野の放浪についてモデルがあります。もちろん、それはイスラエルの四〇年にわたるエジプトから約束の土地への旅路です。イスラエルの子らは、ある意味でどこがその旅の目的地であるかはわかっていたのですけれども、しかし、そこへ導く次の歩みをどこへ進めていくべきなのかということには何ら確かなものはありませんでした。毎日の食することも神様による以外にはありませんでした。ある者たちはエジプ

トの肉鍋があつた以前に居た場所へと戻ることを望んだし、またある者たちは神が待つているように命じられた時でさえ先を急ごうとしました。そして、ある者たちは、モーセ自身が明らかにそうであつたわけですから、目的の地へたどり着くことなくその生涯を終えるということでもあつたのです。

私たちのエキュメニズムの状況というのは、この出エジプトの旅とよく似たものだと思います。私たちが探し求める究極の目的はしばしばばやけて見え、また今、そして近い将来に何をすべきかも確かではありません。いつ私たちは聖なる切望へと招かれ、またいつ聖霊からの新しい指導を待つように示されるのか。私たちのこの放浪の旅路において何が私たちを支え、保つものなのでしょうか。

II

エキュメニズムにおけるこの放浪の旅ということを考えるとき、忘れてはならないことは、私たちがすでに大きな道のりを進んできたということであり、私たちがエキュメニカルなコンテキストは二〇世紀後半に劇的に変化をしてきました。一九五〇年には、ルーテル教会の中で、ルーテル以外の教会とのエキュメニカルな関係を正式にもつていた教会はほとんどなかったといつてよいのです。⁽³⁾一九四八年の世界教会協議会(WCC)の設立は新しい枠組みを創り出したのですが、教会間の新しい関係が実際に始まるということは遅々として進みませんでした。ドイツにおいては、地方のルーテル教会は合同教会、改革派の諸教会との間に、いずれもドイツの福音主義教会のメンバーであるにもかかわらず、聖卓と講壇の交わりを持つことがなかつたのです。⁽⁴⁾北欧のルーテル諸教会は様々な度合いでイングランドの教会との聖卓の交わりを持っていましたけれども、ルーテルと聖公会

の関係はそれ以外のどこにもない存在しないに等しかったといつてよいほどです。

ルーテルとカトリックとの関係は多分に敵対的でさえあつて、一九五一年のマリア被昇天の教理の教皇宣言の後は、ますますそれに拍車がかかる感じでさえありました。同じルター主義の中でさえ、一九四七年のLWF憲章はすべてのメンバー教会が互いに聖卓と講壇の交わりを持つとは宣言できなかつたのです。

一九五〇年に続く数十年が飛躍的な変化をもたらしました。ルーテル、改革派、合同教会は、ドイツおよびヨーロッパ大陸全土を通して、一九七三年のロイエンベルク合意書によつて、聖卓と講壇の交わりになりました。時が経つにつれ、世界の他の地域のルーテル教会と改革派の教会も前例にならうようになったのです。⁵⁾一九九〇年代にアメリカ、カナダ、および北欧（つまり、北欧とバルト諸国のルーテル教会とイギリス諸島の聖公会）のルーテル教会と聖公会はフルコミュニケーションの關係に入りました。いずれの場合も、聖公会は既存のルーテル教会の按手された職務を認めていますし、またルーテル教会は聖公会との交わりにおいて監督の職務の継承のしるしを認めています。⁶⁾こうした対話において、現代のエキュメニカル運動における教会一致と交わりにおいて障害であり続けてきた監督の職務の継承の問題への解決が見出されてきたのです。また、北アメリカとヨーロッパにおいては、ルーテル教会とメソジスト教会も今交わりのうちにあるわけです。

最も驚くべき事は、一九九九年にルーテル世界連盟の諸教会とローマ・カトリック教会とが『義認の教理に関する共同宣言』を調印し、義認の教理の基本的な諸真実についての共通の理解があることを認め合つていることです。こうした合意の上に、それぞれの教会は、義認についての相手教会の教えを今日では断罪しないということ⁷⁾を宣言したのです。この合意の意味するところは非常に大きな広がりを持っています。シヌマルカルデン条項【III5】において、ルターは「この義認の条項に、我々が教皇と、悪魔とこの世に反して教えまた実践している

全てがかかっている」と言っています。⁽⁸⁾もし、カトリック教会とルーテル教会とが今やこの条項に関して十分な合意に至っており、他の細かな違いにも関わらず、もはや互いに相手を断罪する必要がないとするなら、この我々のこの二つの教会の諸関係はどのように形成されていくことになるのでしょうか。(あるいは、少なくとも、ルーテル教会は他の残された違いに対してどのような態度をとるべきなのでしょう。)

全体としてみるならば、エキュメニカルな対話は救済論を扱う諸問題、すなわち、救いの性質についての問題とそれがどのように私たちに与えられるかという問題、つまり義認論とサクラメント論に焦点を当てることにおいて成功してきたと言えるだろうと思います。(例外的にそうは言えない、もつとも重要な問題はバプテスト教会との間の小児洗礼の問題で、さしたる進展はないのですが。)逆に、進展をみるのが最も困難であった領域は、「職務と権威」の問題でした。(その中で例外的に進展をみることができたのは聖公会とルーテルの間での「監督の職務」に関する合意です。)より根源的な合意の上に諸々の違いについては和解をもたらししていくと、違いを内包した合意の方法論は、「職務と権威」の諸問題のケースにみられるように制度的・組織的な意味に直接に関わる問題にあてはめることは難しいということです。

しかしながら、こうしたエキュメニズムにおける進展は、世界のすべての場所において同じように起こってきただけではないことを付け加えておかなければなりません。世界で最も大きなルター派人口を持つドイツのルーテル教会は、北欧や北アメリカでの監督の職務をめぐる聖公会との合意を受け入れたいものとしてみえていますし、また同様に『義認の教理に関する共同宣言』については他のどの教会よりはるかに批判的なのです。また、多くの努力がはらわれているにもかかわらず、アフリカにおけるいくつかの地域で、どちらもそこで多くの教会

員を持つているルーテルと聖公会とは、お互いの教会間の温かな交わりと広がりをもった協力関係というものを制度化していく道を見いだせなかったのです。概して言えば、合意された神学的文書に基づいた公式な関係のモデルというものは、南アメリカやアジア、アフリカにおいては、まだ有効なものたり得ていないということですから。(日本での経験をぜひとも伺ってみたいと思います。)

こうしたエキクメニカルな変化は単純に公式の合意の事柄だけではありません。姿勢の変化ということさらには広がりを持つています。こうした状況を、私自身は、相互浸透的な境となつて「友好的分離状態」と呼んでいます。⁹⁾ (ここに書かれることは私の北アメリカで集められたデータに基づいているので、日本で当てはまるかどうかということは聞いてみたいと思います。)つまり、分かれているということが乗り越えられていないにしても、その関係は少なくとも外面的に大変友好的であるということなのです。ロバート・ウスナウというアメリカの宗教学者は第二次世界大戦以後のプロテスタント教会内におけるカトリックに対する態度、またその逆のケースも劇的に変化したことを報告しています。¹⁰⁾ 相手の教会に対する厳しい判断というものは、今ほとんど公に表されることはありません。それぞれの教会の示すエキクメニカルな合意と神学的な変化というものはいずれもこのような変化の結果であるだろうし、またこうした変化をもたらしている要素だと信じています。ルター派でもカトリックでもおそらく信徒たちは『共同宣言』を読んではいなくてもいいかもしれませんが、ニュースなどでそれについて書かれたものは読んでいるだろうと思いますし、そのことよって、彼らは、たとえ同じ教会に属していなくても、教会に行っている隣人は確かに同じキリスト者だと感じてきたことが確認されたという気持ちを持つただろうと思うのです。

今日のキリスト者たちは、教会の間を分ける境界線というものが超えることができないものとは見ていないに

違いありません。こうした態度の変化は、教会を移る人々の数の著しい増加を招いています。アメリカにおいて、宗教と公共生活に関するビュー・フォーラム（一般討論会）は、私たちアメリカ人の宗教的帰属意識についての詳細な研究を実施し、二〇〇八年にその結果を出版しています。ここでは、実に大人のアメリカ人のうち四パーセントの人が宗教的帰属を移動しています。つまり、あまりつながりを感じられないある宗教から、より関係を持つ特定の信仰へと変わることや、特定の宗教伝統との関係を完全にやめてしまうなどしていることが見出されているのです。⁽¹⁾ある人々にとつては、こうした変化がその生活上の目に見える変化と深く関わっているといえます。しかしある人々には、こうした変化というものは重要なものとは思われていないのです。一つのプロテスタント教会から他のプロテスタント教会へと移動した人々にとつては、特にそうです。最近の研究によれば、アメリカの人々はある町から別の町に引っ越した場合、使っている歯磨きのブランドを変えることよりも容易に教会の教派を変更するというのです。⁽²⁾少なくともアメリカでは、それは極端なケースかもしれませんが、教会間の違いとか、その教会同士での一致しないところということなどは問題だとは感じられてはいませんが、特にプロテスタント教会同士であればなおのこと、教派を変えることが何か恥ずべき悪いこととは全く考えられないのです。

にもかかわらず、教派分離は存続している。たとえば、メソジストと聖公会とか、長老派とルター派のような異なる諸伝統からの教会を含んだ教会一致の話し合いが成功することはほとんどないといつてよいでしょう。カトリックと正教会は互いに聖餐を分かち合うことはいないし、そのどちらもプロテスタント教会と聖餐を分かち合うということはないだろうと思われるのです。福音派とペンテコステ派の教会は、世界の中で急成長を遂げている教会に数えられるのですが、しばしばエキクメニカルな努力というものに対する疑いを強く表わし、また攻撃

的に他の教会を批判し、その教会員を自分の教会に改宗させようとしたりしています。

私たちは教会間の隔たりに行きづまっています。つまり、私たちは、神がその教会に望んでおられると信じる一致には程遠い状態に自分たちがあるということを知らされているのです。そして、エキユメニカルな努力に次第に関心を少なくしてきているのです。(少なくとも私のいる西欧の世界においては、そうなのです。)分離の痛み、あるいは少なくともそれを心地よく思わないという感じは少なくなりつつあって、それとともに問題の緊急性も少なくなってきたようです。私たちはこの放浪の旅路にあって、約束の地へたどり着いてはいないのですが、荒野はまるで住みやすい場所のように見えています。ですから、ほかの問題のほうがより緊急に思われているのです。

III

この荒野を前進するのに何が障害になっているのでしょうか。一つは、すでに私が描いてきたように、私たちの教会の中の多くの人々がこのエキユメニズムについて、それが緊急なことという意識をもっていないということです。しかし、ルーテルと聖公会の合意や『共同宣言』が示しているように、具体的な結果がもたらされるという時には興味関心というものが呼び起こされるのです。

私がここで述べてきたエキユメニズムの放浪の旅が続くということには大きな理由は二つあると考えられます。第一に、私たちは今日、エキユメニズムの目指すところが何かという明らかな感覚というものを持ち合わせていません。私たちの求める一致とは何なのか。エキユメニカル運動の初めから、このエキユメニカルな努力の目

指すところについての問題というものは絶えず議論され続けてきているのです。WCCの信仰職制運動が形成されてくるころのエキュメニズムはそのエキュメニカルな目的として、ある種の制度的な一致の形に焦点を当てていました。一致というものは現在分かれた形である諸教会、また教会の交わりを形作っている別個の構造というものに必然的消滅をもたらすものだとということが前提として考えられていたのです。こうした一致の良い例はインド亜大陸の合同教会、とくに一九四七年に成立した南インド教会です。この理解に立つ古典的声明は一九六一年WCCのニューデリー大会に表されました。その声明は、「それぞれの場所のすべての教会」が「完全に一つの交わりに参与するようになる」と言います。さらに続けて、「この一致の到達は、私たちが慣れ親しんできた教会生活の諸形態の死と再生以外の何ものでもなく、私たちはどんな犠牲も最後には報われると信じている」と言っているのです。¹³⁾

一九七〇年代と八〇年代の間に、LWFの諸教会と他の世界規模の教会の交わりを持つ教会は、このニューデリー声明に表されたような死と再生のイメージに反対するような一致の概念を示しました。一致というのは、個々の諸伝統が消えていくという教会合同を意味する必要があるのか。そのような一致は、神がその個別に分かれたてきた教会の、その独自の歴史の中に与えられてきた個々の賜物を否定するということになりはしないのだろうか。「和解された多様性における一致」に入りつつ、ルター派や聖公会というような個々のアイデンティティーを保つそれぞれの教会が、そのままに完全に参与する一つの交わりというものとして、たとえそれぞれの地域のレベルであっても、一致というものは実現していくようなことはできないのか、と問うたのです。¹⁴⁾

こうした一致の理解は、LWFの一九八四年ブタペスト大会によって採決された「私たちの求める一致」という声明の中にもっとも明瞭な国際的表現を得たといえるでしょう。¹⁵⁾ その声明は、一方では、多様な教会の諸伝統

を一つの使徒的信仰と一つの公同の教会の様々な表現としてとらえています。つまり、一致において、それぞれの諸伝統として別々であった多様性は和解され、キリストの一つの体のうちにおける適切でかつ欠くことのできない多様な形態へと変えられていくのです。また他方で、この声明は、この一致を、共に決議をし、共に行動することを可能とする「参与される交わり」として描いています。この一致は、諸部門において、審議によって事柄を決めていく形態と行動のうち秩序立てるといいます。

この「和解された多様性における一致」の理解は制度的には個々別々にその自律性を残したままの諸教会の間に、「完全な交わり」という目的を実現してきました。この一致の理解は非常によく広められてきたので、このパースペクティヴは単純にルター派的な一致の理解だと捉えられてきています。私の感覚では、同じ地域の中に様々な信仰告白を持つ諸教会が存在することを認めるといふやり方で、ルター派の歴史の中で工夫されたものだということだと思ふのです。⁽¹⁷⁾

この「完全な交わり」という概念がエキュメニズムの目的として発展することは、同時に、アフリカや北アメリカなど世界の様々な場所で組織的一致の合意ができなかったということと軌を一にしています。このことのもたらす神学的な功罪がどのようなものであれ、教派的合同としての組織的な一致のモデルが、世界の多くの場所における諸教会で受け入れがたいものであったということを端的に意味しているのです。その一方で、和解された多様性の中の一一致という考え方は、一九七三年のロイエンベルク合意を通し、ヨーロッパにおけるルーテル教会と改革派教会の間に実現してきたものと思われました。

何らかの組織的な一致こそがエキュメニズムの目指すところであるという主張は、あるところではまだ続いていますし、またこの概念は世界のアングリカニズムでは何らかの規範的なものとして存在し続けていますが、エ

キユメニズム運動、またWCCの中においてさえ、こうした考えは、もはや一致の理解の中では支配的なものではなくなっています。ニューデリー声明がエキュメニカルな呼び声としてどまっている一方で、WCCでさえも「交わりとしての教会の一致・賜物と召し」をテーマにした一九九一年キャンベラ大会におけるより積極的な主張からは退いてしまったのです。¹⁹⁾

私が参照してきたヨーロッパと北アメリカにおけるルター派と聖公会、改革派、メソジストの間でのエキュメニカルな諸合意は、どれも、個別性と自律を保ちながら教会間の完全な交わりを求めるモデルの実現です。こうした合意は、私たちの求める一致を実際にそれらが現実化しているということなのかどうか、問われるべきところにあつてすでに久しいのだと言わなければなりません。²⁰⁾

私見では、この質問には「そうではない」と答えられなければならないと思います。こうした諸々の合意はエキュメニズムの一つの到達点を示すものですが、エキュメニカルな考えの中で適当なものというわけにはいきません。ほとんどの場合、そうした合意に至っている諸教会でも、それぞれはいつもと変わらない働きをしているのであつて、エキュメニカルな対話、関係の相手に対してほとんど意識を持っていないのです。必要性のある状況、特に教会生活の危機における必要性がある場合にのみ、完全な交わりとの関係にある教会は一緒に働いて、牧師の交換をし、一致の生活を生きるということになっています。こうした共同の努力は看過されてはならないし、諸合意が、実際にそこに生きるものたちに重要な貢献をしています。しかし、教会がかつてそうであったのと同じように快適にその教会生活ができるほど十分に力強い時や、またそういう場所においては、まるで何も変わることがなかったようにそれぞれの教会は継続しているのです。完全な交わりにある諸教会のほとんど多くの地域教会、教区、活動主体や委員会などにとって、エキュメニカルな諸合意など何の変化もたらさない状

況にあるのです。

最も明らかな例は、北アメリカの世界でプロテスタント諸教会を疲弊させたセクシユアリティについての討議です。完全な交わりにある教会は、言うところの「一つの教会」であるわけですが、こうした問題についての討議、またそこで決定がなされていく場合に、それぞれの教会は関係する他の教会とほとんど全く無関係に討議し、決議を行っているのです。私の属しているELCAの場合でも、私自身はセクシヤリティの問題の対策委員会においても、エキューメンカルな関わりの中で進めるように主張するのですけれども、これにいつも返ってくるのは「私たちの議論は内々の事柄だ」という答えなのです。しかし、もし私たちが実際にこれらの他教会と完全な一致の目標に到達しているのだとしたら、内向きとか外向きということを決める線をこのような形で引くことが可能なのでしょうか。

私たちが合意に到達しているところは、私からすれば、私たちが求めている一致ではなくて、それは、聖卓と講壇の交わりにまで広がった教派的協力と分かち合いの一つの形なのであって、教派的交わりとも呼ばれるかもしれないところだと思う。より厳しく言えば、これは、分裂の構造をそのままに残しておいて、それを一致と定義づけている「現状肯定のエキューメンイズム」とでも呼ばれるようなものなのです。今日のエキューメンイズムを苦しめているフラストレーションは、私の信じるところ、私たちが到達したこうしたエキューメンカルな諸合意が諸教会の生活に何ら変化をもたらさないでいるという感覚からきているのです。もたらず結果がこれほどに貧弱なものであれば、なされる努力にどれほどの価値があるのでしょうか。

では、これに代わるものは何でしょう。制度的合同という組織的な一致という以前のモデルは、ほとんどの場合に注目のされないままです。教派合同という長い道のりというものは、あまりその当てが見込めないような

のでしかありません。私たちはそれぞれの教派的伝統のなかで賜物をうけとってきたので、どのようなものであれ私たちが達するところの新しい交わりにおいては、そうした賜物を持ち寄ることができるといふ方法を見出す必要があるのです。

思うに、私たちは今この時点で、私たちの求める一致の姿がどのようなものか明らかになしえていないといふことを告白せざるを得ないのだと思います。この一致が当然持つべき性格のいくつかは明確に述べることができません。たとえば、聖餐の交わり、信仰の共同の告白、洗礼の相互承認などです。しかしながら、私たちはどのような制度的取り決めが、この一致を現実化するかということを描き出すことができないままなのです。一致といふことについて、さらに神学的に考えていかなければならないし、また実際の共同の生活の創造的な試みが必要としてもいるのです。

ある程度の放浪はこれからも避けることはできません。ちょうど、教派的交わりのモデルが本来のエキユメニカルな姿としては相応しいものではないと私が語ってきたように、これからなされることになるその試みは、よりふさわしくないとと思われるような結果をもたらすことかもしれません。しかし、私たちはそうした試みから学び、より実り豊かな道を探すことへ押し出されるのです。(おそらく、この日本のようなそれぞれの地域にある諸教会が、他に対するモデルとなるといふよりも、共同性の新しい形を見出していく手がかりを作ることができるといふことだと思われます。)

エキユメニズムの放浪の第一の理由は、それゆえに私たちの目指すべきところについての明瞭な姿を描き切れていないということでありました。第二の理由は、交わりに新しい障害があらわれてきたということでありま

す。もっとも重要な新しい障害は、倫理に関する問題で、特にセクシャリテイの問題なのです。過去において

は、倫理的問題において教会の間に意見の相違がみられるということは、ほとんどなかったといつてよいと思います。いくつかの違いというのは存在したに違いないのですが、ほとんどの場合、倫理的な問題について教会は合意が成立してきたものです。(その違いというのは、たとえば、一六世紀以来ルーテルでは夫婦間の不義や遺棄などが原因で離婚に至った場合、その責めを負わない無罪の側の者は再婚が許されるとしてきたのですが、カトリックにおいては、そうであったとしても再婚は認められていないというような違いが挙げられます。) 教会間でみられる倫理上の違いが教会を分けるほどの論争になるようなことはまれであったと言つてよいでしょう。最も大きな例外は、平和を非常に強く主張するような教会の極めて明瞭な態度ということでしょう。彼らにとつては、「非暴力と平和主義」こそがキリスト者の生活にとつて欠かすことのできないものであったからです。しかし、一九六〇年代、七〇年代には、「道徳的異端」という重大な問題が起こってきました。すなわち、その倫理的見解がキリストにある生活にあまりに相反しているので、教会は厳然とそのような人々を退け、そうした見解をもつ人々たちを守るような教会とははっきりと交わりを断つべきだとするほどの「道徳的異端」といわれるものがあるのかという問題です。^② この「道徳的異端」の概念のもつとも重要な事例は人種主義の問題です。特に、南アフリカのアパルトヘイトのシステムにおけるそれで、改革派世界同盟とLWFはこの問題について妥協的態度をとっていると考える教会に反対する断固とした態度をとったのです。

北アメリカのプロテスタント教会において、今日活発に議論されることが起こっています。それは教会が同性同士の結婚(共同生活)を祝福できるか、またそうした関係にある人が按手を受けた牧師、またビショップになるのにふさわしいかどうかという問題です。こうした問題に諸教会が異なる結論に至った場合、それは、教会間の交わりにどのような影響をもたらすのでしょうか。一つの教会の牧師や司祭が他の教会の倫理規則にも開かれ

ているとみられるのであれば、それら諸教会は一つの按手された職務において一致しているといわれるのでしょうか。より根源的に、諸教会が一つの教会であるとするならば、セクシャリテイの問題に関して、どのような共通の倫理的証言をそれらの諸教会は持つことになるのでしょうか。

これらは、エキュメニズムにおける難しい課題です。私たちは、倫理的な見解の違いについてのエキュメニカルな議論をしてきた経験に乏しいのです。エキュメニカルな対話において倫理的テーマを取り上げることはほとんどありませんでした。しかしながら、アングリカン・コミュニオンの中での議論が証明しているように、こうした問題は本当に関係を鋭く分け隔てるものなのです。(おそらく二〇一〇年のシウトウトウガルトにおけるLWFの大会において、この分野における違いがルター派の交わりの中でどのような影響を持つのかということを私たちは見いだすことになるでしょう。) エキュメニズムにおいては、こうした議論の影響というものは大きな広がりを持つこととなります。明らかに、こうした問題は、一方にカトリック、正教会、そして福音派の諸教会、他方にたとえば聖公会やルター派など、セクシャリテイの問題で変化の方向へ動き出したに見える古いプロテスタント諸教会という二つの群れの間に新しい違いをもたらす恐れがあるのです。二〇〇八年のランベス会議、世界規模の聖公会の主教会議で、ウォルター・カスパール総主教は、聖公会の見解を公にして、すなわち、「この同性愛者の問題に関しては、聖書と使徒的信仰への忠誠が問題になっている」ということを述べました。⁽²²⁾ また、スウェーデン教会が同性愛者の結婚(ユニオン)に対して祝福をするという決定をしたことに対して、英国教会の主教会議からスウェーデン教会に批判的書簡が送られたことも注意をすべきことと言えます。⁽²³⁾ この事柄に軋轢の生ずる可能性があるということをあまり小さく見積もるべきではありません。

これらの論争は、単に教会間のもしくは教会の交わり間のことでなく、むしろ教会内、コミュニオン内の問題

であり、そして、こうした内部論争がまたエキュメニカルな影響を持っているのです。私たちはアメリカにおいてこうした論争が教会内のエネルギーをすべて吸いつくし、そのエネルギーをこの教会内議論に集中的に傾ける有様を見てきました。すでに述べてきましたように、諸教会はそれぞれ他の教会に関わらない状況の中で、これらの問題について議論しているのです。ルター派と聖公会とエキュメニカルな関係がアメリカにおいて影響を持たない一つの理由は、どちらの教会もこの自分たちの教会の中の議論に没頭してきたということなのです。

この論争はまた、異なる信仰の伝統のうちにある世界規模の教会の交わりを弱めたり分裂をもたらしたりしています。聖公会コミュニティオンにおける騒動が衆目を集めていたとき、他のコミュニティオンが何の影響を受けないままではいまいでしょう。すでに、ラトヴィア、エストニア、リトアニアのルーテル教会は、スウェーデン教会との牧師交換について、将来的にはそれが制限されたものになると言っているのです。理由は、スウェーデン教会と同性同士の結婚に祝福をすることへと開かれたからです。⁽²⁴⁾この教会の世界的交わり、聖公会コミュニティオンは他の諸教会や交わりにとって、統合した対話の相手でありつづけるのでしょうか。この統合性ということは、ある特定のグループを対話から排除するという代償を払って初めて手に入れることができるものなのでしょうか。少なくとも、エキュメニカルの対話はより込み入った状況にある時代に入ったと言っよいでしょう。

私たちはここまで大きな距離を進んできたのです。けれども、これ以上に歩みを進めることは、私がここで述べてきた理由やあるいはそのほかの理由から、難しいだろうと思われまます。エキュメニカルな努力は続けられなければならないけれども、その成果は非常に限定されたものになるような時代にあるということなのです。

このような状況のもとにあつて、私たちの固有なエキュメニカルな課題、特にルター派ということの中の課題とは何でしょうか。私たちはエキュメニズムへの動機とエキュメニズムが私たちに示す課題についての基本的な問いを問うことが必要なのだと私は信じています。エキュメニカルな努力に努めている者たちは、様々な理由からその努力を続けています。少なくとも、二つの異なる教理的態度が、エキュメニズムにおける態度の違いを特徴づけているのです。一つは、教理的懐疑主義によつて、エキュメニズムへの態度が形成されているような人々がありました。私たちが教派的に分けられているのは、私たちが何らかの確かさを持つことによるのです。つまり、私たちは私たちが信仰のみによつて義とされるとか、あるいは、確かに主の晩餐のそれぞれの物素なかに、ともに、そのもとにキリストは現在されるといふことを知っていると考えています。私たちはそのこと⁽²⁵⁾に確かであつたからこそ、私たちはこの教理のために教会の一致を犠牲にしようといふことであつたのです。しかし、今日、この見解をもつことが有効であるといふことに、私たちがより懐疑的になつてきています。私たちは私たちが真実を知つていふことに確かでなくなつてきていて、それゆゑに、私たちは他の者たちとの妥協を見出そうとすべきといふことになるのです。ここでは、より真実が弱まつて、より一致が求められるといふことになるわけ⁽²⁶⁾です。

しかし、第二番目の態度とは、真実に対する異なる見方から生じています。私たちのもろもろの確信は決して偉大すぎたといふことはなく、むしろ、狭すぎたと考えられるのです。私は、自分のエキュメニカルな関心といふものが、教会の一致への深い関心から生じたのではなくて、むしろ、ルーテルとカトリックの対話の文書によ

り豊かで完全なルター主義を発見したところによって生じたことを告白しなければなりません。私たちのもろもろの信仰的な確信は、それらが肯定することにおいて正しく、むしろ、それらが排除することにおいて誤ってきたのです。エキュメニカルな努力において、私たちは分裂が私たちから隠してきた、より広い真実を見ますのです。より広いエキュメニカルな対話の中でのみ、福音のこの豊かさは十分に開けてくるので、私たちはなにが真実に私たちを一つにするのかを見出すのです。ですから、ここでは、より真実であることが、より一致を意味することになるのです。

サザンセミナーでの私の同僚、デイヴィッド・イーゴは、何が特徴的にルター派であるかということと、何がルター派を固有のものとするものなのかという二つのことを区別します。何がルター派を特徴づけるものかということとは、ルター派の人たちがどういったことを話す傾向があるのか（あるいは、少なくとも話そうとすべきか）ということ、それは、イエスであり、三位一体であり、洗礼における私たちの更新ということなどです。何がルター派を固有のものかということは、なにが私たちを他からは切り離してルター派であるとするのかということです。なにが私たちを分けるのかということですから、もっとも明瞭に言うなら、それは、イエス・キリストのゆえに、信仰をとおして、恵みによって義とされるといふ義認の特別な理解であるということになります。分離というものは私たちをルター派として区別するものを私たちに強調させる傾向があるわけです。しかし、私たちがルター派として区別するもの、義認の特別な理解というものは、実はより広いキリスト教の伝統と私たちが何を共有しているかという脈絡の中で初めて意味をなすことになります。つまり、神のことばのナザレのイエスという人間への受肉の教理、またそれと関連した三位一体の教理という脈絡です。エキュメニズムは、私たちの教理的な主張を水増しするということでは決してありません。そうではなくて、私たちの教理的な主張

を、より明瞭に、キリストの教理や三位一体の教理にある、より広い教会というものの中で共有しているところに深く根付かせるといふことなのです。私たちはエキュメニズムを教理的な刷新、教理的な肥沃化の運動として捉えなおすことが必要なのです。エキュメニズムは困難に値する、というのは、それが私たちにとってより偉大な真実を私たちに開くときに言えることなのです。

この種のエキュメニカルな関わりというのは今日のルター主義における種々の傾向に対するチャレンジであると考えています。私自身の教会にも、また他の教会にも強いルター派のアイデンティティーへの関心、すなわちルター主義を他から分けるもの強調するようなプロファイル・エキュメニズムと呼ばれるところへの関心がみられます。⁽²⁶⁾私の恐れるところは、こうした強調が、私たちを私たちが学ぶことができるものから引き離してしまうこと、また宗教改革そのものが私たちにもつように励ましてきた開かれた、また謙虚な態度から私たちを引き離してしまうことなのです。

ルター派がそれを正しいとしてきたという意味で、これがルター派的態度だとしたからといって、それが実際には正しいということの意味しません。

私たちは、キリストの義における私たちの義認を告白するルター派の中心的な信仰告白を承認できますが、なお、いくつかの事柄においては宗教改革は間違った結論を引き出したというような批判に受け入れることができます。こうした結論のいくつかは歴史的状况によってルター主義に押し付けられたものであります。宗教改革期の神聖ローマ帝国において、どの司教もルター派につかなかった。おそらく、どの司教もルター派につくことができずに、その職務にとどまったのです。一方、北欧のルター派は監督制を保持し、スウェーデンにおいては監督の継承が保たれました。監督制はドイツのルター主義においては失われたのです。これは大きな喪失で

あったわけですし、私たちの聖公会との関わりの中で北欧とまた北アメリカのルター派教会は何がしかのものを得たのです。ルター派は、さらにある種の教皇制についての議論をも受け入れるべきでしょうか。

ルター派の歴史、そして他のプロテスタントの諸伝統の歴史も何らかの中心的な教理的権威とリーダーシップが必要であることを示してきたのではないのでしょうか。たとえ私たちが現在の教皇制の在り方を好まないとしても、福音主義的に受け入れることのできる教皇制のイメージを積極的に探し求めるべきではないのでしょうか。こうした議論に入るほどに十分に自己批判的であるかどうかが問題なのです。

ルター主義とルター派的なエキュメニズムの将来は、なかなか予測しづらいものです。私の短い生涯においても、すでに劇的な変化が起きてきました。今まで世界のルター主義を支配してきた北アメリカのルーテル教会は小さくなる一方です。私の教会ELCAは継続的下降線にあつて、二〇〇八年に七万六千人もメンバーを失っています。そして、今日世界中で四つあるもつとも大きなルーテル教会のうち二つはアフリカにあるということです（エチオピアのメカネ・イエス教会とタンザニアルーテル教会）。将来のルター派エキュメニズムにとって、決定的に重要なことは、アジア、南米、そして特にアフリカのルーテル教会の実践なのです。これらの教会は、ルター派の固有性を強調して他の教会からの距離を保とうとするのでしょうか。彼らは単なる共同ということに満足して、教理的また制度的な違いということをそのままに手をつけずに置くのでしょうか。あるいは彼らは他者のための道を示すような新しい一致の形を見出すのでしょうか。

エキュメニズムは様々な働きを必要とします。エキュメニズムは『義認の教理に関する共同宣言』に現実化したような注意深い教理的な取り組みを必要としますし、また実際の奉仕の業における協働というものを必要としているのです。世界のルター主義は、北の欧米大陸の外に新しい指導力を必要としていますし、またその欧米の

歴史のなかに生まれてきた分裂の状況にそれぞれ自分たちの言葉を持って話をしていくことが必要になっていきます。私たちは現在の荒野の放浪が様々な形をとっていくことを見守る必要があるのです。使徒言行録の五章に出てくるガマリエルの言葉に従うことが求められているということなのです。そして、どのような働きが実りをもたらすのかを見ていかなければなりません。

では、そのような放浪の歩みの中にある私たちを支えるものは何でしょうか。この問題は単なる神学の問題というよりも、また同時にスピリチュアリティーの問題でもあります。私が思うには、私たちには二つのスピリチュアリティーが必要となっています。すなわち一つは一致のスピリチュアリティーで、いまひとつは、分かれること、分離のスピリチュアリティーです。

一致のスピリチュアリティーは、今この時間の中にある一致が、たとえ部分的なものにすぎなくとも、この与えられた一致を生き抜くことを求めていくものです。いまは分かれていた兄弟、姉妹のために、またその者たちとともに祈る方法を見出していくのです。それは、また私たちの信仰告白的な孤立した領域の外について神学的に考えていく道を求めていくのです。このスピリチュアリティーは自らの伝統の限界性について自己批判的でまた非防衛的です。エキュメニカルなスピリチュアリティーという言葉が用いられるとするならば、一般的には、この積極的な一致のスピリチュアリティーが考えられるところだと言えらると思います。

しかしながら、このような一致のスピリチュアリティーがあれば、この荒野を歩んでいくのに十分だと言えるのでしょうか。このような一致のスピリチュアリティーにとっては、私たちの分裂した状態は、ただ否定的なものとして、それはただ乗り越えられるものとしてのみ考えられるにとどまります。けれども、私たちは同時に分離のスピリチュアリティー、私たち分かたれていることを意味あるものとするスピリチュアリティーが必要な

ではないでしょうか。私たちは、もちろん、分かれていくということがよいとか、それが神によるこぼれるというふうにはなりません。しかし、神は悪しきものから良いものをもたらされるお方なのです。もつとも重要なことは、神がキリストの十字架から救いをもたらされるということです。復活を抜きにしては、キリストの十字架はただ否定的なもの、人間が神を否定したことの頂点ということにすぎません。けれども、神はこれを我々の救いの時とされたのであります。そして、私たちの救いは、私たちがこのキリストの十字架への参与というのを抜きにしては実現しないのです。つまり、私たちはキリストとともにキリストのうちに死んでまた生かされるように召されているのです。私たちは、この分裂の否定性を、キリストの十字架を負うとき、キリストとともに十字架に死すべき時として生き抜くことができるのではないのでしょうか。このようなスピリチュアリティーは分裂の痛みを避けることがありません。つまり、いま私たちがそこでキリストの体と血にあずかることが許されないような、多くの他の教会の聖餐があるという現実を避けることがないのです。また、このスピリチュアリティーはそれゆえに私たちが他のキリスト者とするべく、また根本的な違いを持つていることを否定しませんし、また、私たちはその私たちと違う他のキリスト者たちがわたしたちと同じキリストにある部分であることを否定しません。一致のスピリチュアリティーは、私たちに約束されたキリストにある一致を待ち望む一方、分裂のスピリチュアリティーはそのキリストにある一致が部分的なものであることを認識し、いま私たちが見出す場所、そこから逃げ出すことのできない現実として、その部分的なものを生き抜くのです。もし、予見できる将来においては、エキュメニズムが荒野の放浪であるとするならば、どのようにして、私たちは約束された一致の土地を忘れずにいることができるのでしょうか。おそらくは、それは一致のスピリチュアリティーに負うところなのでしょう。では、そうした私たちが、同時に、この荒野の状況の中で祝福を見出すことができるので

しょうか。そこに見出される祝福は、痛みを伴ったものであるとしても、あのキリストとともに苦しむことを経験する祝福であるに違いないのかも知れません。

このような講義において、私が出来ることは、ここに申し上げたような問いを浮かび上がらせることはかりで、これに答えることは出来ません。私たちはその答えを、これからのエキュメニズムの旅路において見出していくのです。エキュメニズムの近い将来は、それ程明るいものではありません。神が私たちの一致の求めにどのように答えてくださるのか私たちは知らないのです。この時に、私たちは見ることによってではなく、信仰によって、エキュメニカルに歩み続けることが出来るだけなのです。しかし、確かな希望をキリストにのみ見出す者には、こうした信仰の歩みが続けられることだけで十分なのです。

注

- (1) グーグルで「エキュメニズム冬の時代」で検索をすると五七〇のヒットがあります。私自身「エキュメニズム冬の時代」をいう言葉を1982年の聖公会と東方正教会との関係文書の中にすでに見いだしていました。Jeffrey Gros, Harding Meyer, and William G. Rusch, eds., *Growth in Agreement II: Reports and Agreed Statements of Ecumenical Conversations on a World Level, 1982-1998* [Geneva: WCC Publications, 2000], 82) のたぐいの、典型的な例は、以下の文書に見られます。G. R. Evans, *Method in Ecumenical Theology: The Lessons So Far* (Cambridge: Cambridge University Press, 1996), 1, and Jon Nilson, *Nothing Beyond the Necessary: Roman Catholicism and the Ecumenical Future* (New York: Paulist Press, 1995), vi.

- (2) Elena Curri and Michael Hirst, "Amid the Cold, Signs of a Thaw." *The Tablet*, 21 January 2006. [Http://www.Thetablet.co.Uk/article/507](http://www.Thetablet.co.Uk/article/507).
- (3) 過去半世紀にわたるルーテル教会の他の教会との関係についての研究を参照してください。Vilmos Vajta, ed., *Church in Fellowship: Pulpi and Altar Fellowship Among Lutherans* (Minneapolis: Augsburg Publishing House, 1963).
- (4) *Koinonia: Arbeiten des Ökumenischen Ausschusses der Vereinigten Evangelisch-Lutherischen Kirche Deutschlands zur Frage der Kirchen- und Abendmahlsgemeinschaft* (Berlin: Lutherisches Verlagshaus, 1957).
- (5) Joint Working Group between the Lutheran World Federation and the World Alliance of Reformed Churches, *Called to Communion and Common Witness (Report: 1999-2001)* (Geneva: Lutheran World Federation, 2002).
- (6) この場合、文書についての報告を分析してください。Michael Root, "Porvoo in the Context of the Worldwide Anglican-Lutheran Dialogue," in *Apostolicity and Unity: Essays on the Porvoo Common Statement*, ed. Ola Tjørdhom (Grand Rapids: Eerdmans, 2002), 15-33. 全書文書をご覧ください。Sven Oppgaard and Gregory Cameron, eds., *Anglican-Lutheran Agreements: Regional and International Agreements 1972-2002* (Geneva: Lutheran World Federation, 2004).
- (7) The Lutheran World Federation and The Roman Catholic Church, *Joint Declaration on the Doctrine of Justification* (Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2000).
- (8) Robert Kolb and Timothy J. Wengert, eds., *The Book of Concord: The Confessions of the Evangelical Lutheran Church* (Minneapolis: Fortress Press, 2000), 301.
- (9) Michael Root, "The Unity of the Church and the Reality of the Denominations," *Modern Theology* 9 (1993): 385-401.
- (10) Robert Wuthnow, *The Restructuring of American Religion: Society and Faith Since World War II* (Princeton: Princeton University Press, 1988), 91ff.
- (11) Pew Research Center, *U.S. Religious Landscape Survey, 2008* (Washington, DC: Pew Forum on Religion & Public Life, 2008), 5.

- (12) Ellison Research, "Protestant Churchgoers Are no More Loyal to Their Church Denomination Than They Are to Brands of Toothpaste or Bathroom Tissue," news release (12 January 2009).
- (13) Harding Meyer, *That All May Be One: Perceptions and Models of Ecumenicity*, trans. William G. Rusch (Grand Rapids: Eerdmans, 1999).
- (14) Michael Kinnamon and Brian E. Cope, eds., *The Ecumenical Movement: An Anthology of Key Texts and Voices* (Geneva: WCC Publications, 1997), 88.
- (15) LWF に於けるついでた理解の発展に関する重要な文献は、以下のものを参照してください。Günther Cassmann and Harding Meyer, eds., *The Unity of the Church: Requirements and Structure*, LWF Report, no. 15 (Geneva: Lutheran World Federation, 1983).
- (16) Carl H. Mau, ed., *Budapest 1984 "In Christ—Hope for the World"*, Official Proceedings of the Seventh Assembly of the Lutheran World Federation, Budapest, Hungary, July 22-August 5, 1984, ed. Carl H. Mau, LWF Report, no. 19/20 (Geneva: Lutheran World Federation, 1985), 175.
- (17) 初期のルーテル教会の態度に関する歴史研究は、以下の文献を見てください。Wilhelm Kahle, "Fragen lutherischer Einheit von der Reformation bis zum Ende des 18. Jahrhunderts," in *Wege zur Einheit der Kirche im Luthertum*, Die Lutherische Kirche, Geschichte und Gestalten, vol. 1 (Gütersloh: Gerd Mohn, 1976), 9-58.
- (18) 以下の報告文献の中にも、重なり合った治裁権に関する例がいくつかあり、これを参考文献としてください。"Called to Be One" of the 1998 Lambeth Conference, *The Official Report of the Lambeth Conference 1998: Transformation and Renewal, July 18-August 9 1998, Lambeth Palace, Canterbury, England* (Harrisburg: Morehouse Publishing, 1998), 220.
- (19) Günther Gassmann, ed., *Documentary History of Faith and Order 1963-1993*, Faith and Order Paper, no. 159 (Geneva: WCC Publications, 1993), 3-5.
- (20) 私はこの問題をすべし次の文献の中で提起しています。Michael Root, "A Striking Convergence in American Ecumenism," *Origins* 26 (1996): 60-64

- (21) こうした言い方がエキュメニカルな会議の中で執拗になされたのは、1968年のWCCのウプサラの会議において、ウォルヘルム・ヴァッサー・ターントにやっつけられた。(W. A. Visser 't Hooft, "The Mandate of the Ecumenical Movement," in *The Uppsala Report 1968: Official Report of the Fourth Assembly of the World Council of Churches Uppsala July 4-20, 1968*, ed. Norman Goodall (Geneva: World Council of Churches, 1968), 313-23).
- (22) Walter Kasper, "Roman Catholic Reflections on the Anglican Communion," *Information Service, Pontifical Council for Promoting Christian Unity* 129 (2008), 147.
- (23) <http://www.cofe.anglican.org/info/ccu/europe/notices/replytoabsweeden.pdf>.
- (24) 二〇〇六年三月六日付のソルト諸国の主教たちからウプサラの総主教宛てに送られた手紙を参照していただく。 http://www.lutheranalt/ritulinis/straipsniai/2006/santtuoka/santtuoka_anghtm.
- (25) この立場をこの頃の良好な例は以下に見いだすことができます。 John Shelby Spong, "Hope and Fear in Ecumenical Union," *Christian Century* (1983): 579-81.
- (26) Wolfgang Huber, *Im Geist der Freiheit: Für eine Ökumene der Profile* (Freiburg: Herder, 2007).

(訳・石居 基夫)